

W-2-1 ル動詞を構文論の観点から見直す

尾谷昌則（法政大学）

1. はじめに

1.1. 構文の定義

- Langacker (1987)、Taylor (2002) 意味と形式の結びついたもの。
Goldberg (1995) 形式や意味に「予測不可能性」があるもの。
Goldberg (2006) 「予測不可能性」が無くても、十分な頻度があれば構文

1.2. 構文の典型条件

- ① 意味と形式がペアになった言語ユニット。 【これは必須条件】
- ② その言語ユニットが、複合ユニット（2語以上）であれば、より構文らしい。
（ただし、「構文」ではなく「構成体」と考えれば、形態素こそが構成体の典型か）
- ③ 形式面・意味面のどちらかに予測不可能性があれば、より構文らしい。
（意味よりも、形式が予測不能＝統語規則を破っているものの方が、より構文らしい）
- ④ その複合ユニットにスロットがあれば、より構文らしい。
- ⑤ その複合ユニットに十分な頻度があれば、より構文らしい。

1.3. 構文として研究する意義が生じるのは

- ① その表現に、予測不可能性があることを示せる場合
- ② それを基にして拡張した構文（予測不可能性を有する）があることを示せる場合

1.4. 構文ネットワーク

Lakoff (1987)、Taylor (1989) 構文もプロトタイプを中心にカテゴリーを成す

Goldberg (1995) 4つの継承リンク

Langacker (2000)、Taylor (2002) カテゴリー化に還元（精緻化と拡張で動機付け）

山梨 (2000, 2009) 融合ネットワークモデル、グローバル構文

- 大きな括りであれば、「精緻化」と「拡張」にまとめることができる。ただし、「拡張」には様々な種類があるので、それらを考えるべき（尾谷・二枝 2011）。
- 拡張の種類としては、メタファー、メトニミー、類推（寄生的拡張）だけでなく、アマルガム、混交、主観化、などいろいろありそうだが、これらは、「**構文間ネットワーク**」と「**構文内ネットワーク**（＝構文の多義ネットワーク）」のいずれで見られるのかという違いがありそう。メタファーなどは両方に見られるだろうが、主観化などは構文内ネットワークだろう。アマルガムや交差は、前者の方だろう。
- 「別の動詞クラスも使用可能になる」、という拡張は、構文内ネットワークだろう。構文の多義と同じで、結局はスロットに入る語彙（動詞？）の意味クラスによって、構文の意味も変わってくる。でも、それだと、結局は構文の意味が語彙（動詞）の意味に還元できてしまうことになるので、「構文らしさ」はやや落ちることになるかも。
- 構文ネットワークは、「銀河系」のイメージ（以下の図を参照）

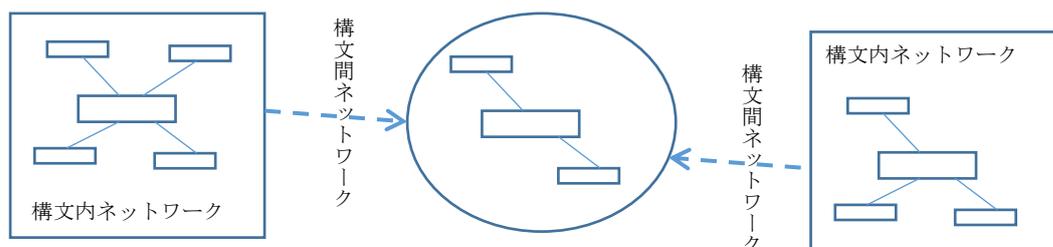


図1 構文間ネットワークと構文内ネットワーク

2. ル動詞について

- (1) a. 少しでもミスるとテンパってしまうんだ.....とか愚痴る奴ほどすぐサボる。
b. オレのボス ヤフーでググレと 無理を言う (2017年「サラリーマン川柳」第9位)

バズる、ググる、ハモる、サボる、ダブる、メモる、コピる、ミスる、トラブる、テンパる、愚痴る、駄弁る、牛耳る、カモる、ケチる、チクる、事故る、告る、拒否る、ポシヤる、パクる、リムる、ザビる、タクる、デコる、アピる、ガチる、デイスる

【場所名詞】 デニる 【オノマトペ】 ボコる、ポチる、オギヤる

【タ形で使用】 まずった 【テイル形で使用】 ナナメってる、ラリってる

【連用形で使用】 パシリ

意外に古くからあるル動詞

- (2) a. はやる馬に乗り、をりまはしておはする (「宇津保物語」970~990頃) ※「早い」
b. 暁に炭車^{タンシヤ}に駕りて、氷に輾轍^{キンルアト}あり (「白氏文集天永四年点」1113) ※「キシキシ」
c. 春雨にちる花みればかきくらしみぞれし空の心地こそすれ (「千載和歌集」1187) ※「^{みぞれ}囊」
d. 此四句は謂漢武目出事而下は玄宗をきよくつた也 (「杜詩続翠抄」1439頃) ※「曲」
e. 吉野川見所おほしといふ事は大きな鮎を料るゆへかも (狂歌「後撰夷曲集」1672) ※「料理」
f. 「これ新や、茶づらせろ」「何けづらせるとかへ」「これさ、そんなにしゃれずと、はやく持て来やな。のう色男、ちっくり茶づつてみこじやないか」(「遊子方言」1770) ※「茶漬・洒落」
h. アア、ぢぐり出してはむつかしひ (「一目土堤」1788) ※「地口」
i. ぐっとゑぐりに剣菱^{ケンボシツ}てずどんとしてみせる (「大千世界楽屋探」1817)
j. はや黄昏て、田甫(たんぼ)には耕作する人もなく (「英対暖語」1838)
k. 件の『居候君』に『世辞る』^{セジ}体なく (坪内逍遙「内地雑居未来之夢」1886)
l. 少し優しい言葉でもかけられると直ぐに涙、まことにしほらしい娘々した、ラブるのには持て来いといふ女になってしまう (国木田独歩「第三者」1903)
m. 鮎にしようか、汁粉にしようか、と歩行^{テウ}つて居る紳士のやうな (泉鏡花「婦系図」1907)
o. コスめる 身のまはりを美しく繕ひ着飾る男子にいふ。『めかす』『ハイかる』などと同義。(中略) 『コスメチック』を動詞にしたのである。
(下中芳岳『改訂増補 ポケット顧問や、此は便利だ』1918)
p. デコる 装飾といふ意味の **Decoration** をもちったもの。建築家などが要りもしない処に、余計な飾めいたものをべたべたと貼りつけ、継ぎ足してゆく事の嘲笑語
(服部嘉香・植原路郎『訂正増補 新しい言葉の字引』1919)
q. ジャズる 頹廢的なジャズそのもののやうな出鱈目な生活をする事。またはジャズに合わせて踊ることをもいふ (喜多壯一郎『モダン用語辞典』1930)

3. 一般的に言われていること

- ル動詞はどんな語にも付く (米川 1996)
 - ①英語、②日本語、③人名、④述語動詞をルで代用したもの (タクる=タクシーに乗る)
- ル動詞は、五段活用動詞になる
- ル動詞は、「2 モーラ+る」が典型であり、「3 モーラ+る」などは例外 (窪菌 2002)
- ル動詞になる品詞は 11 種類もある (堀尾 2014)

動詞 (の省略)	形容詞	な形容詞	名詞
----------	-----	------	----

固有名詞 擬音語 擬態語 外来語
 方言 隠語 その他（語源不明）

◆ ル動詞の意味（堀尾 2014）

- ① 動詞 (動詞を) 省略したことが多い (しくる)
- ② 名詞 「(名詞) のようだ」という意味になる (ブタる)
- ③ 固有名詞
 - 1 模倣する、同じように振舞う (安倍る)
 - 2 ある特定の人物の問題行動をすること、またその批判 (アサヒる)
 - 3 場所の固有名詞で何かをする、その場所へ行く (デニる、マクる)
 - 4 その場所で乗り換え等をする (たんばばる：丹波橋で乗換える)
- ④ 擬音語・擬態語 「その語が表す様子である」「そのようにする」
- ⑤ 外来語 「その意味を持つ動詞にしている」

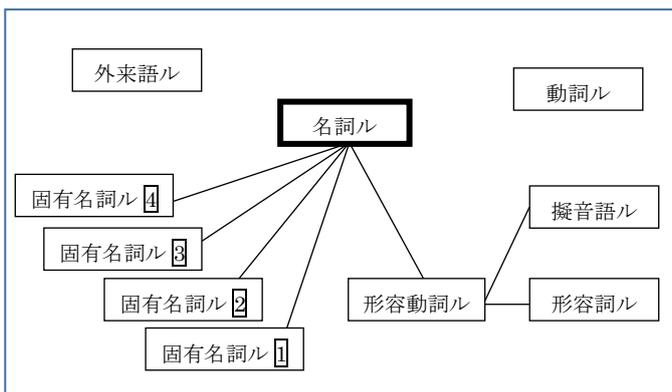


図2 ありがちな構文ネットワーク(1)

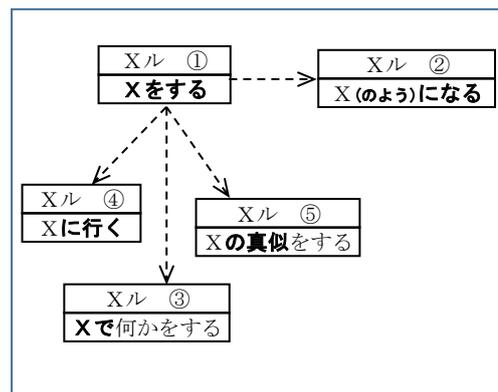


図3 ありがちな構文ネットワーク(2)

ありがちな構文ネットワーク(1)の問題点

- 形式でのみ分類している。それも、単に品詞・語種による分類。
- それらが本当に「構文」になっているのかを検証していない。
- 意味の面を考慮していない。意味が重複するものもある。
- 共通点がある品詞を線で結んだだけで、下位構文間の関係について熟慮されていない。

ありがちな構文ネットワーク(2)の問題点

- 意味の分類はしているが、その予測不可能性については論じていない。
- 形式面の予測不可能性についても論じられていない。
- 「Xル (Xをする)」がプロトタイプになっているが、他の構文との関係（構文リンク）が述べられていない。本当にそれらを「拡張」で結んでいいのか？
- たぶんメトニミーリンクのような拡張を考えるのだろうが、本当にメトニミーで拡張したと言えるのだろうか。
- 例外的な個別事例を無視している。(もっとバリエーションは多いのに。)

4. 構文ネットワークじゃなかったら、何なんだ？

〈外〉の関係の連体修飾とイベント・スキーマ

- (3) a. 魚を焼く煙
- b. 子供が遊んでいる声
- c. 母親が台所で食事の準備をする {声、音、気配、etc.}

- (4) a. 〈S〉：[料理のイベントスキーマ]
- b. → 〈N〉：デフォルト値：{声、音、気配、etc.} (山梨 1995:182)

5. 「ル動詞」の再分類 ～予測不可能性に着目して～

A. 典型的なパターンと思われるもの（意味・形式ともに予測可能性がそれなりにある）

- | | | | |
|-----------|------------|---|------------------|
| ① 「Xヲスル」型 | サボタージュをする | → | サボる |
| | メモ（を）する | → | メモる |
| | ミス（を）する | → | ミスる |
| | 告白（を）する | → | 告る |
| ② 「Xニナル」型 | パニックになる | → | パニックる |
| | テンパイになる | → | テンパる（意味変化も起きている） |
| | ザビエルみたいになる | → | ザビる |

B. 意味が予測不可能な事例（形式面は、「省略」でも説明ができる）

- | | | | |
|-----------|-------|---|-----|
| ③ 「Xニスル」型 | カモにする | → | カモる |
| ④ 「Xニ入ル」型 | ツボに入る | → | ツボる |

C. 形式が予測不可能な事例（「省略」では説明できない、意味も予測不能）

- | | | | |
|-------------|------------|---|-----|
| ⑤ 「Xヲ残ス」型 | 着信履歴を残す | → | 着る |
| ⑥ 「Xヲ決メコム」型 | 日和見を決め込む | → | ひよる |
| ⑦ 「Xデ移動スル」型 | タクシーで行く | → | タクる |
| ⑧ 「Xヲ言ウ」型 | 愚痴を言う（こぼす） | → | 愚痴る |
| | 皮肉を言う | → | 皮肉る |
| ⑨ 「X●歌ウ」型 | ハーモニー●歌う | → | ハモる |
| ⑩ 「Xヲ起コス」型 | 事故を起こす | → | 事故る |
- } 典型例だと感じてしまうのは矛盾していないだろうか？

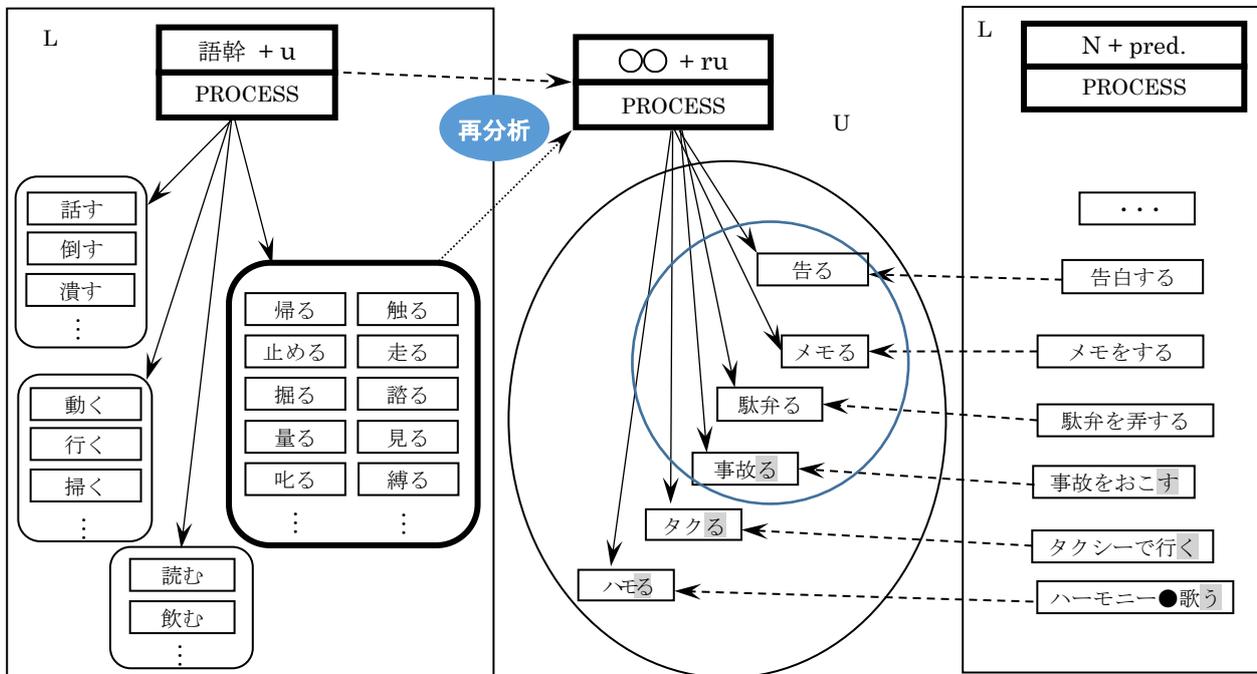


図6 融合ネットワークモデル（山梨 2009）とル動詞

6. 結語に代えて

【問題①】 構文の意味を特定の語彙意味 (ex.動詞の意味) に帰することができるのか。

「構文らしさ」を考えるならば、特定の語彙意味に帰することができない意味 (構文的意味) がなければ、構文として分析する意味が無くなる。「X ル」構文で言えば、「X」や「ル」の意味に帰することは出来ない意味が「X ル」にはある。

【問題②】 下位構文同士のネットワーク (構文リンク) の理論的提案と具体的な言語現象の分析がどのように接続するのか。

構文リンクを考えて、理論的な研究を目指すのは格好良いかもしれないが、初心に戻ってまずはカテゴリー化 (事例化と拡張) の観点から語法研究も含めてしっかりと考えるべき。いきなり静的ネットワークをトップダウンで描くのではなく、下位レベルスキーマと具体事例を重視して、動的ネットワークをボトムアップでコツコツ考えるべき。静的ネットワークはそれを簡略表示したものに過ぎず、最初から目指すものではない。

【問題③】 形式の異なる構文同士のネットワーク (動機付けの関係) を認めるか。

認めてもいいだろう。形式は異なるが客観的意味が同じ (s-synonymous) という表現は存在する。仮にそれらをA構文、B構文とすれば、A構文 (「メモをする」という他動詞構文) が、他のB構文 (例えば「○○+u」) の形式を借りて、B構文の仲間入りを果たす場合もある。「しくった」は、「しくじった」という非省略形式に動機付けられていることは明白であるが、両者は形式的には別構文である。ただし無制限に認めるわけではない。例えば「BUZZ った」などは対応するA構文が存在しないため、異なる構文からの動機付けもない。事例ごとに事情は異なるので、柔軟に考えるべき。

【引用文献】

- Goldberg, A. E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. 2006. *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. New York: Oxford University Press.
- 堀尾佳以 2014. 「若者言葉にみられる言語変化に関する研究」博士論文, 九州大学.
- Lakoff, George 1977. "Linguistic Gestalts." *CLS* 13, 236-287.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. 2000. "A Dynamic Usage-based Model." In Barlow, M. and S. Kemmer (eds.) 2000. *Usage-Based Models of Language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- 尾谷昌則・二枝美津子 2011. 『構文ネットワークと文法 — 認知文法のアプローチ』東京: 研究社.
- 大堀壽夫 2001. 「構文理論—その背景と広がり—」『英語青年』147(9), 526-530. 東京: 研究社.
- Taylor, J. R. 1989. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John R. 2002. *Cognitive grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- 鄭香蘭 2008. 「若者語におけるル言葉について～歴史的な流れ～」『山口大学文学会志』57, 83-110.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』東京: ひつじ書房.
- 山梨正明 1999. 「言葉と認知のダイナミクス」『認識と情報』33-51. 京都: 京都大学学術出版会.
- 山梨正明 2009. 『認知構文論—文法のゲシュタルト性』東京: 大修館書店.